

◇あのとき世界の潮目が変っていた？

大槻伸次

今年（2022年）の2月、この21世紀において誰もが予想だにしなかった露によるウクライナ侵攻が勃発し驚愕した。プーチン大統領は部下の誤った情報により2～3日で「キーウ」陥落と判断し侵攻したが大失敗で7か月後の現在も苦戦している。

下記は2016年に纏めたものですが、今度の露によるウクライナ侵攻を鑑みてあのとき（2016年）世界の潮目が変わっていたのかなと改めて思い起こしている。

…2016年末の大統領選挙で、ヒラリー・クリントン氏が逃げ切ると思いや、真坂のトランプ大統領の誕生でビックリ仰天した。我々は新聞やテレビ等のマスコミやネットから入る情報で世界の流れを理解するが、最近世界の潮流に変化が起これつつあるのではないかと感じる。トランプ大統領の誕生は勿論のこと、イギリスのEUからの離脱、中国の領土拡張政策とAIIB（アジアインフラ投資銀行）の設立、ロシアのクリミア半島侵略など立て続けに起っている。ところが、不思議なことにこの4か国は国連の常任理事国なのである。5常任理事国との他の1か国はフランスであるが、フランスだって立て続けにテロが発生し、移民排斥を掲げる右翼政党の国民戦線（マリーヌ・ルペン代表）が躍進しEU離脱を掲げている。この動きはオランダなど他の欧州諸国にも広がっている。第2次世界大戦後、世界の流れは2度と戦争が起らぬよう仕組み（国連設立や欧州統合・貿易のルールを決めたガット）がつくられ皆で努力して行きましょうということだったのではないだろうか。また、アメリカが世界の警察官の役割を担ってきたのも、東西冷戦による核兵器開発も、戦争を起さないための抑止力だったと理解してもいいだろう。

ところが、アメリカンファーストのように「他の国の事より自分達の事」というような流れに変わってきた。イギリスのEU離脱の明暗を分けたのは流入する移民で、2004年以降EUが拡大するに従い、英国に移民する数が上昇しその移民に国内労働力が移転し公的サービスにも大きな負荷がかかったことが要因とされています。

しかし、その要因は移民だけではなくグローバリゼーションとロボティックスに職を奪われた「中間層の喪失」に問題の本質があるといわれている。これらはアメリカも同様な現象で、中間層から転落したプアーホワイトと呼ばれる人達が不法移民によって仕事を奪われたと憤慨しトランプ氏を支持したといわれている。

第2次世界大戦が終ってから70余年の時が流れ世代が交代し、戦争を身近に感じられなくなった世代の人達が世の中を動かし始めているんだろうなと感じている。

今でも紛争地域はあるけれど、少なくとも先進諸国ではニュースで見るくらいであまり現実感はない。この先、世界がどうなっていくのか判らないけれど、現在の繁栄は第2次世界大戦による反省から、米国を中心とする西側自由主義陣営が、貿易の自由化を強力に進めた結果であるのは間違いないだろう。そこで、世界が「自国中心主義」をとれば、これからどういうことになるのか火を見るより明らかである。そこで世界のリーダーに言いたい、ポピュリズムに流されることなく政治をやってほしいと願う。その潮目が2016年であってはならない。（2022/9/23以前のものを再編集）